

# ◆連載

# いま留萌をかし

## ●藤山の開拓

明治二十九年、留萌の内陸部の開拓の父ともいえるべき藤山要吉が留萌原野に三百町歩の土地の貸し下げを受け、藤山農場を開いた。

最初の入殖者である笹島喜一郎氏の記録から当時の様子をおとしてみよう。

「私は明治二十九年十三才のとき兄に従って、富山の伏木港をあとに留萌へやってきま

した。来道の動機の一つは、当時小樽の藤山要吉さんが入殖者を募集しているとのことであった。ことに兄(二十才)の渡道という機会に恵まれた。もう一つは郷里富山では想像もつかない五町歩の土地が貰えるという魅力に引かれて、一つ頑張りうという気になっ

たことです。一、中略一海路数日を経て留萌着となった。留萌の永福寺は藤山農場入殖の

わらじ脱ぎとされた。準備も整えて小舟に分乗して留萌川をさかのぼった。藤山農場の入殖規定は一カ年間は米味噌や日常必需品それに家屋も支給された。これは一応貸与とい

うこととなる。そして四年間完成までいて、開墾完了者

はこれを棒引きにする。途中で帰る者はその分を返済しなければならぬ。年貢についていうと小作料をおさめるのは五年目で、大体雑穀で二斗三斗でした。収穫は四斗俵

で四、五俵でした。一、中略一藤山農場というのは、今の藤山部落が中心で十二線から二十三線までのところをいいます。一様に五町歩の区画であ

ったが、その中に川あり山ありで多少違っていた。入殖者は主に富山県、石川県の人々であったが、四国の人もあった。入殖の当初は大体山地同様に繁茂し、熊笹が身を没する二メートルも生い茂っているところ

に九尺二間の小屋が建てられていた。畑を作るため笹を刈り木を切って焼くのですが、まず冬に木を切り倒し夏にこれを集めて焼くわけ

です。笹の根もいちいち掘りかえしていかねばならぬし、木を焼く時は今の様に野火に

よる草焼きができません。周囲に木が繁っているからです。一番先に蒔くのは小豆や蕎麦の類です。大豆は伸びすぎて実ができない。次は麦、いな

な、馬鈴薯で、最後に菜種を蒔くわけ

です。交通としては他の道内の入殖者からみれば恵まれていたといえよう。その後、この入殖者の子孫から留萌を動かすひとたちが多数輩出している。

船着場があつて、ここから留萌川を下るわけ

です。一日上りは三日かかりました。この笹島翁の記録は当時の状況を的確に伝えている。ただ、藤山農場へ入殖した人々は他の道内の入殖者からみれば恵まれていたといえよう。その後、この入殖者の子孫から留萌を動かすひとたちが多数輩出している。



入植者の家づくり

昭和62年11月/発行・留萌市編集・総務部秘書企画課印刷・株式会社留萌新聞社

1987

人の動き 男16,955 (減7) ・ 女17,727 (減17) ・ 合計34,682 (減24) 世帯数12,973 (減6) 9月末現在